注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
ＩＳ　メビウスの宇宙を越えて

【作者名】
諸木屋

【あらすじ】
「宇宙世紀００９３　君は今、終局の涙を見る…」

・もし逆襲のシャア後にアムロとシャアがＩＳの世界に転移したら…　という感じの二次創作小説です

・文才はないです（）

＃００　メビウスの輪を越えて

…Ｕ．Ｃ．００９３

……「ララァが死んだ時の苦しみ、存分に思い出せ！」

……「世直しの事、知らないんだな。革命はいつもインテリが始めるが、夢みたいな目標を持ってやるから、何時も過激な事しかやらない！」

……「愚民共にその才能を利用されている者が言う事かっ!!」

……「νガンダムは伊達じゃないッ!!」

……「結局、遅かれ早かれ、こんな悲しみだけが広がって、地球を押し潰すのだ… ならば人類は自分の手で自分を裁いて、自然に対し、地球に対して、贖罪しなければならん… アムロ… なんでこれが分からん！」

……「分かってるよ！　だから、世界に人の心の光を見せなきゃならないんだろ！」

……　サイコフレームの共振により遂にアクシズが地球から離脱を始める。だが、相反する二人の「英雄」の行方を知る者は存在しない……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「グッ・・　ここは・・　？地球か!?アクシズは落ちなかったのか!?
うぅ、　だが、空気が俺の居た地球とは違う・・・」

　意識を取り戻したアムロ、だが直感的にここが自分の居た世界では無い。そう感じていた。

「νガンダムも見当たらない・・・　別世界だなんて、そんな絵本みたいな話、俺は信じたくないぞ・・・・・・・・・・・　ッ！誰だ！」

「私だ、アムロ。・・・・・・・・・　今は一時休戦と言う事にしよう。ところで、ここは何処だ？地球だが、地球ではない様な・・・　不思議な場所だ。」

「シャア・・・・・・　まぁいい、こんなところでは反抗のしようがないだろうしな・・・　後此処が何処かなんて、俺にも分からない」

「これもサイコフレームの共振よるものなのか？・・・　まぁ少し散策してみるか、アムロ。」

　二人が少しその場所を散策しようかと思案していたその瞬間

「動かないで貰おう」

鋭い、女性の声だ。二人は手を挙げ、女性の方に体を向けた。

「貴様達は誰だ、そして何処から進入して来た？」

「私はネオ・ジオン総帥・・・ キャスバル、いや、シャア・アズナブルだ。目が覚めたら此処に居た・・・ という理由では納得してくれなさそうだな。」

「僕はロンド・ベルＭＳ隊の隊長、アムロ・レイです。シャア・・・ そこの男の言う通り、意識を取り戻した時には此処に居たのです。」

「ネオ・ジオン？ロンド・ベル？ＭＳ？ふざけているのか？貴様達は」

冷たい声と鋭い目でこちらを睨む。

「どう言う事だ？ネオ・ジオンやＭＳを知らないだと？アムロ、やはり此処は・・・」

「ここではなく、しっかりとした場所で話す必要性がありそうだな・・・ すみません、貴女の名前を伺っても良いでしょうか？」

「私はＩＳ学園の教師、織斑千冬だ。先程の話、冗談かもしれんが・・・ 一応詳しく聞く必要性がある。ついてこい。」

「すまない、感謝する、千冬。行くぞアムロ」

「ＩＳ学園・・・ 何なんだ・・・ 本当に絵本の世界に来てしまったのか・・・」

二人の相反する英雄の新たなる物語は、ここから始まるのであった。

＃01　ＩＳ

「ＩＳ学園、か。名前的にハイスクールなのだろうが、ＩＳ、と言う文字が気になるな」

シャアが通された会議室の様な部屋で一人呟く。

「お前達、ＩＳを知らないのか？」

先程よりかは落ち着いた、あまり冷たい感情を感じさせない声で千冬が尋ねる。

「よければ教えて貰えないでしょうか、その『ＩＳ』についてを」

「まぁ待て、先にそちら側の情報を聞かせてもらおう。」

・・・アムロは一つ一つ、説明した。宇宙世紀の存在、ＭＳの誕生、新人類、ニュータイプについて、一年戦争、アクシズ・ショック等を一つ一つの思い出を懐かしむ様に、そこに自分が生きた証があったと確かめる様に説明していった。

「・・・成る程な、にわかには信じ難いが、そんな話を冗談でも思い付く奴はいないだろう、それに、ここまで真剣に話してもらって信じない奴も居ないだろうしな。信じさせてもらう事にする。」

若干半信半疑ではあっても信じてくれた事にシャア、アムロは感謝した。

「助かる。それで、ＩＳについてなのだが・・・」

二人は千冬にＩＳについての説明を受けた。

男女の力を逆転させた『兵器』についての話を。

男尊女卑から女尊男卑へと変えた話を。

「フン・・・ ＩＳか、男性が守らねばならない女性に逆に守られる事にならとはな。全くもってナンセンスだ。」

「シャア、お前がそれを言うか？」

「しかしアムロ、先程のＩＳについて何を感じた？・・・ 私は正直『恐怖』を感じたよ。女性ならばハイスクール、いやそれ以下の年代でも扱える兵器と言うのは恐ろしいと思わんか？」

「あぁ、確かにそうだな・・・。女性しか扱えないと・・・「いや例外はあるぞ」

千冬がアムロの声を遮る。

「会話の途中にすまない、だが少し言いたくてな・・・ 私の弟、織斑一夏は男であるがＩＳの起動に成功した。」

「ほう、興味深いな・・・ 例外はあると言う事か。・・・ ん、アムロ、そのポケットから出ている物はなんだ？」

シャアがアムロのポケットを指差す。

「シャアこそ、何かでてるぞ。これは・・・ 俺のエムブレムの形をしたペンダント？こんな物持ってたか？」

「私もネオ・ジオンのエムブレムの形のペンダントが・・・ 不思議だな、

どことなく暖かい様な…」

「… すまないが二人とも、少しそれを貸してくれるか？」

「む、なぜだ？」

「ＩＳである可能性があるからだ。それに、身に覚えのない得体の知れない物を持っていても少し気分が悪いだろう？」

「まぁ確かにそうだな… シャア、預けるぞ」

「仕方ない。気に入ったのだかな。」

「少し解析するのに時間がかかるかも知れない。だが不用意に出歩かれても困るから、極力この部屋からは出ないでほしい。なにか用事があればそこのボタンを押してくれ。では失礼する。」

「ＩＳ… か。どの世界でも人は戦争を忘れる事が出来ないのか。」

アムロは天井に向かい、一人呟いた。

―数時間後―

「解析が終了したぞ。やはりアレはＩＳだった様だな。」

「なんだと！」

「シャア、落ち着け。」

「今からお前達にＩＳ適正があるかのテストも兼ねて格納庫に向か

う。ついてこい。」

「・・・了解した。」

「ここが格納庫だ。お前達のＩＳ・・・ペンダントを返す。念じながらもう一度触れてみろ。」

最初にシャアが自分のペンダントに触れた。

「む！・・・ほぅ、私にもＩＳの適正があるようだな・・・しかもこのＩＳ、サザビーと瓜二つだな・・・。」

「やるな、シャア！では俺も・・・」

続いてアムロもＩＳに触れた。

「おぉ・・・俺にも適正があるのか・・・うん、外見はνガンダムとほぼ同じだ」

手応えを感じ、喜ぶ二人を尻目に、千冬は少し驚愕していた。

「まさか二人共適正があるとは・・・・・うん、これは・・・」

「・・・お前達、悪いがＩＳ学園に入学してもらう。手続きや偽装書類はこちらの方でなんとかする。今日は二人分の寮の部屋を貸してやるからそこで寝泊まりをしろ・・・」

「何!?私やアムロはハイスクール生徒と言うような年齢を越えているぞ！」

「・・・ 冗談で言ってるのか？お前達、少し鏡を見てみろ。」

「どれ、うーむ・・・ 若返ったのか？確かにこれならハイスクール生として生活する事が出来そうだが・・・」

「しかし、気がつかなかったな。自分は勿論、シャアまでが若返っていたなんてな・・・」

「ふ、まぁとりあえず今日ももう遅い、寮を案内してやるからついてこい。」

「了解した。千冬。」

「学園に入学を決めたんだから千冬ではなく織斑先生と呼べ。」

「了解しました。うむ、うんむ、織斑先生・・・。」

何とも言えない顔でシャアが返事をする。

「それでいい。ちなみにお前達のクラスは私が担当を勤めるクラスだ。そちらの方が色々とやり易いだろうしな。」

「お心遣い、感謝します。」

「ありがとうございます。織斑先生。」

＃０２　出会い

千冬に寮の部屋を案内されたアムロとシャアは意外にも互いにくつろいでいた。

「シャア・・・　まさか貴様とこうして同じ部屋で寝泊まりする事になるとはな・・・」

「仕方の無い事だろう。明日も早い。もう私は寝るぞ」

そう言い残し、シャアは自分のベッドへと入っていった。

「・・・　シャア、まだ貴様を信頼した訳ではないからな・・・。」

「・・・　フッ、別に構わんよ。だが信じてほしいのは、私は一度人の心の光を見た者だという事だ。」

「シャア・・・」

アムロは無言で、部屋の電気を消した。

翌日

「今日が初めての学園だな、アムロ」

「あぁ・・・　変な真似はするなよ？」

「それはお互い様だろう」

二人は苦笑しながら、自分達の組の担任を勤める織斑千冬の後ろに続いていた。

「ここがお前達のクラスだ。・・・　少し待っていろ」

そう言い残し、真っ直ぐにクラスへと入っていった。

その後、謎の歓声や机を叩く音が聞こえた気がしたが、アムロとシャアは聞かなかった事にした。

「シャア、アムロ。入ってこい」

その呼び声に応え、二人は教室の中へと入る。

「失礼させてもらう」

「失礼します」

「簡単な自己紹介をしろ」

「・・・　私の名前はシャア・アズナブル。好きなカラーは赤だ。よろしく頼む。」

「僕はアムロ・レイです。趣味は機械いじり。どうぞよろしくお願いします。」

・・・　辺りが静まり返った。嵐の前の静けさかの様に。

「(おい、アムロ！私は何も間違えてなかっただろうな⁉)」

「(俺もお前も、大丈夫だったはずだがっ・・・)」

その、瞬間

『きゃあああああぁあっ!!』

「ぐぉっ！」

「新手のサイコ兵器か!?」

いきなり叫びだした女子生徒を前にアムロとシャアは混乱してしまった。

「男子！しかも二人も！」

「金髪の子の方、威厳が凄い！」

「天然パーマの子もカッコ良いよ！」

まさか、男と言うだけでここまで大きな声が出せるとは・・・ アムロとシャアほ更に混乱した。

「お前達！少しは静かにしろっ！」

その一言で教室は静寂に包まれた。

「シャア、お前は織斑の後ろ。アムロはシャアの後ろだ。」

「了解した。」

ＨＲも終わり、少しまた騒ぎ始めた頃・・・

「俺、織斑一夏。男は俺一人かと思ってたから少し安心したぜ！」

「初めまして・・・だな。私の名はシャア・アズナブル。以後よろしく頼む。そしてこっちが・・・」

「アムロ・レイだ。一夏、よろしく。」

二人にとっての一夏への印象は好印象であった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

授業も終わり、三人で少し平穏な時間を過ごしていると

「少し、よろしくて？」

「ん？」
「何か用だろうか？」

声を掛けられた方を向くと、ヨーロッパ・・・イギリス系の顔の、傲慢な表情を浮かべた女子生徒が立っていた。

「まぁ、なんですのその態度！　このセシリア・オルコットに話しかけられるだけでも光栄な事なんですのよ？」

「それは失礼をした。セシリア・オルコット・・・代表候補生のいわばエリートと言った所か。」

「代表候補生だったのか・・・」

アムロとシャアが少しうなづいていると、

「シャア、アムロ…」

「どうした？一夏」

「代表候補生って、何？」

その言葉にセシリア含めたアムロ、シャアの三人がずっこける。

「まぁ、一夏… ＩＳのエリートみたいなもんだよ。」

「へぇ、詳しいんだな、アムロ」

「流石にこれは常識だと思うが…」

シャアが苦笑していると、

「まぁ本来エリートであるこの私があなた達と釣り合うなんて事はありえませんし、クラスが同じという事だけでも奇跡なのですわよ？」

「……」

「まぁ、私はエリートであり優秀であるからＩＳの事で困った事があれな泣いて許しをこえば… 教えてあげない事も、ないですわ」

「(女尊男卑に染められてしまったのだろうな… アムロ)」

「(仕方ない、と思うことにするしか…)」

「唯一試験で教官を倒したのもこの私……」

「ん、… ？試験官なら俺も倒したぞ。」

「は・・・？」

「そ、そんな訳が・・・」

セシリアは少し狼狽える。

「女子生徒の中では、って事じゃないのか？」

「おい、一夏よせ！」

「アムロ、お前も急に立ち上がるな！」

怒りで震えているように見えるセシリアに割り込むかの様に休憩時間終了のチャイムが鳴る。

「・・・っ！また、後で来ますわっ・・・！逃げない事！よろしくて!?」

セシリアが去り、着席したのと同時に千冬が入ってくる。

「（一体何だったんだ、あいつは・・・）」

「では、授業を始める・・・だが、その前に決めねばならん事がある。」

「再来週にあるクラス対抗戦に向けてクラス代表を決めなければならない。自推でも構わんが、誰かを推薦する者はいないだろうか。」

「クラス代表か・・・どうする？シャア・・・おい、シャア？」

シャアはチャンスを感じていた。なぜならネオ・ジオン総帥時代に学んだ事やカリスマ性を、フル活用できると考えたからだ。

「クラス代表…。フフフ、指導者であるこの私の出番だという事だな。」

シャアは小声で、だが大きく神に感謝しつつ呟いた。